



↑一番上が首相官邸。下は財務省上交差点。道路右側が国会、左側が衆議院別館と内閣府。永田町と霞が関一帯を20万人の巨大な渦が埋めた（6月29日夜、ヘリから）。撮影＝フォトジャーナリスト・野田雅也氏（JVJA）

# この光を世界中が見ている

官邸前デモは、運動の新たな形だ。マスコミの取り上げ方も積極・消極的と両極端に二分された。（田中稔）

20万人（主催者発表）が参加した行動で、一人の逮捕者も出さなかった。驚くべき新たな運動の形が始まっている。

首相官邸前で毎週金曜日夜に恒例となっている原簿再稼働に抗議する集会（主催・首都圏反原発連合）は、ツイッターなどで呼びかけられ、今日まで参加者数の衰えを見せていない。

ピークは6月29日夜だった。主催者の発表で20万人。夜の光景は実に

衝撃的だった。午後5時20分すぎ、首相官邸前に鮮やかな薄紫色の紫陽花（フジサイ）の花などを持った市民の列が、溜池方面の内閣府下までつながり内閣府一角を取り囲みつつあった。人の群れが衆院議員面会所前や議員会館前の歩道を埋め、路上にあふれた。長野県からバスをチャ

ーイとして訪れた人々もいた。福島県内の被災地からも多数が参加。午後6時開演時にはすでに4万5000人（主催者発表）を上回って

いた。午後7時を過ぎると、歩道に収まり切れず、車道にあふれた。主催者発表で20万人の巨大なうねりが、警視庁のバリケードを決壊させ、道路は解放区となった。

午後7時半、機動隊の大型バス6台が官邸正門に滑り込み、官邸とデモ隊の間に大きな壁をつくった。官邸正門を強引にブロックしたのだ。この日の行動は市民の間で「紫陽花

革命」とも呼ばれた。労組や企業といった組織から動員されて集まったわけではない。ツイッターやフェイスブックなどソーシャル・ネットワークで集会を知り、市民たちが自主的に集まった。夜8時を過ぎると、自主的に散々と散会していく。これまでになく運動の形だ。

60年安保闘争以来の大事件である。大手新聞の取り上げ方は積極的だ。『東京』などと、極めて積極的な『読売』などに二分された。各紙の

翌6月30日朝刊を比較してみた。『朝日』一面は写真入りで参加者15万18万と報じ、39面に写真3枚入りの記事を掲載した。『毎日』一面は写真入りで「反原発 人の波」と報じた。一面に続き29面に写真入りで参加者15万人規模と載せた。『東京』は一面トップに写真を大きく載せ、社会面にも人物写真記事を掲載した。『日経』は39面に写真入りで参加者を数万人と報道。『産経』28面にベタ記事。警察関係者による「と明記し参加者を2万人弱と報道。産経新聞社広報部は本紙の取材に対して「いずれも当社の判断によるもの」と回答。

『読売』は社会面に小さなベタ記事のみ。警察調べの参加者数1万7000人としか掲載しなかった。本紙の取材に対して読売新聞グループ本社広報室は「記事掲載や判断に関するご質問には従来お答えしておりません」と回答。同志社大学社会学部メディア学科教授でジャーナリストの浅野健一さんは次のとおり指摘した。

「記者クラブメディアは反原発デモを過去40数年、黙殺してきた。再稼働反対の官邸前行動も無視してきたが、6月29日の20万人に達し、7月6日も15万人が集まって、なぜ報道しないのか」とネットで非難された最初の報道を始めた。東京新聞だけは最初から伝えていた。参加者数は「主催者発表で20万人。警視庁調べで1万7千人。主催者発表15万人。警視庁調べ約2万1千人」などと報道された。数字が違いすぎる。専門家などは動員して自分で数える努力をするか、主催者発表だけに努めた。特に日本で最大部数を誇る読売は6月30日と7月7日に小さく報じた。いずれも参加者数を「警視庁調べ」とした」